

インド報告

2006年12月10日(日)～12月18日(月)

その1

12月11日(月)

初日の大仕事！「寄附金贈呈式」報告

西村ゆり



出発まで ～分かっているけどこわいです～

今回のインド旅行は、これまで3年間、「光の教室事業」の力強い支援者でいてくださった「京都仏教会」が、企画・募集をされた“インドツアー”参加の皆さま、総勢24名を、ムンバイの「光の教室」にご案内することを第一の目的としていた。このインド旅行団の名誉団長は、有馬頼底・京都仏教会理事長。(相国寺・金閣寺を代表する立場におられる方なのだ) 団長は、宮城泰年・同常務理事。(この方は、京都の「聖護院」を統括されている)お二方も、有名な方である。インドは初めて、という方も多く、“皆さまにとって有意義な教室訪問にする”責任は重い。一人で大丈夫なんだろうか…

初日、いきなり、光の教室での“寄附金贈呈式”と“スラム見学”、そしてBLPとの“ディナー”、の3つが予定されていた。(最初に旅の“山場”がくるわけ)その後の行程は、12日～16日まで単独行動をし、最終日(17日)に、アーグラの“JALMA”(中央JALMAハンセン病研究所)で一行と再び合流。この施設の設立者である宮崎松記博士と、西村の父の墓前で“法要”を行って帰国。まあ、変化に富んだスケジュールですこと！やること、行くところが多く、しかもその内容がいちいちユニーク。インド側に説明するのも結構大変で、苦労して説明したが、日本の文化や宗教的な慣習を、インド人がどこまで理解できたのかは不明だった。

準備が始まったのは、半年も前。BLPやJALMAとの細かいやりとりが続き、ホテルや飛行機の変更、ツアー添乗員の方との打ち合わせの行き違いなども頻発して、次第に神経がピリピリ。出発が迫るにつれて不安ばかりが募っていた。

大体、行きの飛行機からして不安だ。出発前日にハードな予定を入れたので、当日早朝発のJAL機(仏教会一行が乗られる飛行機)には一緒せず、私だけ少し遅い出発のシンガポール航空機を利用することになったのだが、途中の乗り替えが不安。(私は方向音痴) その前に、子ども達へのプレゼントのノート(50冊！)を詰め込んだ“重すぎる”トランクが心配。(超過料金がかかりそう…) 何より、釈尊誕生の国でありながら、“仏教”の在り方が日本とまるで違うインド。(現在、インドの“新仏教”は、アウトカーストの人達の解放運動をかなり過激に展開しており、あちこちで他宗教との衝突が起きている、と聞いていた) スラムで、もし皆さまに何かあったら…と思うと、夜眠れなくなってしまった。

出発直前まで、花谷めぐむに、スピーチ原稿やインドへの確認のメールの英訳を次から次へと頼み、しょっちゅう電話しては、泣きごとを訴える有様。(ほんとにごめんね) 誰か止めてくれるかと期待したけど、「何とかなるって。行ってらっしゃーい」ほんまに人ごとやと思って…。仏教会、BLP双方に失礼があってはならないのに、私の英語が poor(下手くそ)なせいで、仏教とヒンドゥー教との摩擦が生じたらどうしたらいいのよ！それでも私に“やめる”といえるわけがない。わかっております…これは、私の“当然の”光栄な仕事です。…でも、やっぱり…こわいです…

12月10日(日) <関空 SQ617→シンガポール SQ424→ムンバイ>

6:30 運を天にまかせて迎いの MK シャトルタクシーに乗り込む。まだ外は真っ暗。何故か背広姿の出張らしい男性ばかりの車内。『これからどうなるのかなあ…』と、呆然としているうちに、タクシーは関西国際空港に到着。

まず第一関門。機内預けのトランクをスルーして、座席チケットを手に入れること。「いいですか、重量オーバーしそうな時は、係の人に話しかけたりして、量りの目盛から注意をそらさせるんですよ」という旅慣れた人からのアドバイスに従い、(あっちこちに電話して、色々きいたのだ)、不必要に係の人にニコニコ笑いかける私。その方は、テキパキした対応で、あっさりトランクを通して下さり、「お気をつけて行ってらっしゃいませ」とやさしく見送って下さった。(チラッと目盛りを見たら、どうもオーバーしていたようなのに、何ていい人！)この旅が、温かい声から始まったことが嬉しく、一気にリラックス。(もう、この人のことは、敬語でしか伝えられません。)

11:00 SQ617 便離陸。16:00(現地時間)シンガポール着。
関空の出発ゲートで買った枕は大ヒット。6時間、首まわりがとても楽で気持ちよく寝られ、機内で会った人達も親切だったので、やっと旅行気分を味わう心境になってきた。…が、乗り替え機の SQ424 便“1時間遅れ”の表示。4時間半待つ

ことに…。電話のコーナーから、インド・BLPのパイさんに到着の遅れを連絡し、ゴージャスな品物が並ぶショップを見て回り、(高!)何とか、そう疲れずに20:30次の飛行機に搭乗。23:30ムンバイ着。(シンガポールとの時差は約1時間)

BLPからのお迎えの車でホテル・プラザへ。最初、ムンバイでの4日間をメタさんのお宅で過ごす予定だったのだが、メタさんがご病気だというメールが来たので、パイさんに教室に通いやすい場所にあるホテルの予約を頼んでいた。その「ホテル・プラザ」のフロントのおじさん、「日本人の予約なんてないぞ」と言う『またかい…』と、うんざりしながら、パイさんが、日本にファックスして下さっていた“予約確認書”を水戸黄門の印籠のようにおじさんに見せる。どうだ!“OK,OK”…でチェックイン。こういうことにも馴れるものなのね。(何回目や)通された403号室は、今年3月に泊まって、ヒヤヒヤしたシーロードホテルの部屋を、少し“上等”にした程度(かな)。シャワーの水が止まらない。

部屋から仏教会一行が宿泊されるイースタン・インターナショナル(旧ホリデー・イン)に電話を試みるが、つながらない。もう朝になってから連絡するしかない。『明日、無事にモンスーンクラス(光の教室)で皆さまと会えたらいいけど…』成りゆきに任せるしかないので、式典のプログラム作りとプレゼントの用意をしてからやっとベッドに入った。シャワーの水音を聞きながら、午前4時就寝。(しかし…長いプロローグやな…)

12月11日(月) <ムンバイ> 寄付金贈呈式

6:30 モーニングコールで起床。朝食はホテルのビュッフェ。けっこう品数が多い。

8:00 になるのを待って、部屋から BLP のパイさんと、イースタン・インターナショナルにいる“はず”の添乗員、諏訪さんに電話する。今度は両方無事つながり、BLPが、仏教会ご一行のホテルと私のホテルに、別々にお迎えの車を差し向けてくださることになった。(この“機動力”がBLPの強みなのだ)

9:30 カマートさんを乗せた車がホテルに。まずBLPのオフィスへ。パイさんをピックアップしてから、アクウオース病院に向かう。ホテル・プラザはBLPのオフィスにも病院にも近いのだが、月曜日のためか、いつもより更に車が多いようで、なかなか辿り着かない。

10:40 やっと病院に着く。3ヶ月ぶりの光の教室。教室(小さな小屋)の隣に立つ建物。そのガランとした広い部屋に、式典の用意が整えられていた。さすがBLP! 私からの訳の分からない依頼の内容を想像で補って、これ以上望めないくらい立派な場所を作って下さっていた。人数分の椅子が並べられ、前方に置かれた二つのテーブルの上いっぱい子ども達の手芸作品や、沢山の絵、勉強したノートなどが広げられている。



その子ども達は、といえば、一隅に集められて(今日は小さい子ばかりのように見える)何が始まるのか、とキョトン。「また会えたね。元気だった?」と一人一人抱きしめるが、みんな雰囲気呑まれてボンヤリ…。ほんと可愛らしい。そのうちに年長の子ども達もパラパラ入ってきた。最前列の椅子に、シスター・セラフィンが座っておられ、抱き合って再会を喜ぶ。ガナパティさんも来られ、いつもながらの悠然とした態度で“how are you?インドに来てから連発している“ティーク・ハエ”(元気です)で応え、二人で笑う。(私のヒンディー語は笑うしかない)

それにしても、仏教会一行のご到着が遅い。(10:30の予定だった)朝の諏訪さんとの電話で、昨夜のホテル到着は、結局午前1時になった、と聞いていた。チャーターされた大型バス、車の波にもまれて難儀しているに違いない…。皆さま、きっとお疲れだろうに、今朝の式典が、私のせいでおかしなものになったらどうしよう…と、また心配しても仕方ないことを心配する。

11:00 を大分過ぎたころ、やっとバスがアクウオース病院の敷地に現れた。まあ大きい!とびっくりする。会場の前に停車した立派なバスから、まず法衣姿の有馬師が堂々と降りてこられ、続いて、これもきちんと正装された数名のお坊様たち、そして普通の?ツーリストの装いの仏教会ツアーのメンバーの方々が、次々と姿を見せられた。ヒन्दウー教徒がほとんど、というこの国の、それも“スラム”周辺で、これは滅多に見られない光景であることは確か。京都仏教会・事務局長の長澤香静師も、初めて拝見する美しい色の法衣姿。「西村さん、やっとインドでお会いできましたね!」と、私を見るなり、歩み寄ってこられた。

1年以上も前から、長澤師は、このインドツアーの実現に力を尽くしてこられ、初日(今日)の式典を、3年間続けた「光の教室支援」の“総仕上げ”だと認識されていた。'04年の秋、初めてお会いしたその日に、この事業の趣旨を理解され、以降、理事会と光の音符の間に立って、本当に親身に、徹底した支援を続けてきて下さった方。今回の仏教会ツアーは、教室訪問(“インド児童福祉交流”)以外に、“仏跡めぐり”も含む内容で、参加者全ての方が、支援の内容に詳しいというわけではない。それでも、寄付を続けてきた事業の現場で、受益者である子ども達と会って、成果を確認する、という今日の行程が、この旅行の大事な目的のひとつであることを、事前の旅行説明会で皆に話され、私も、その会に出席して説明させていただいていた。(“顔が見える”支援。単に“あげる”のではなく、寄付行為を通して

双方が“交流”することの大切さ…。長澤師がそのことをここまで理解され、仏教会が今回、それを実行されたことは、私たちに、とても幸せなことだった)

…だからこそ、余計に心細い。私の英語が、せめて今日だけでも十全に通じる“奇跡”を祈る。…そんなこんなで、一人ウジウジ心細がっている私をよそに、皆さま、元気に会場の中に入られ、子どもの可愛らしさに歓声をあげ、近付いて抱き寄せ、(子ども達は目を更に大きくして、カチンコチンに固まっていた。そりやそうだ)展示された作品、会場の内外、特に教室の内部に興味しんしん。さかんにカメラのシャッターを切っておられた。インド側のガナパティさんもシスターも、威厳のある有馬頼底師を、一目で“大人物”と認め、この事業やBLPのアピールに一生懸命。子ども達もあつという間に馴れ、交流は、勝手にどんどん進んでいた。(子どもの力はすごい！何の説明もなしで、事業の実状をありのまま伝えている)

とにかく時間が遅れているので、「式典を始めましょう」と大声で呼びかけ、やっと全員会場に集まって着席。

『さあ、これから私は日本とインドを“平和に”つなぐのよ！』と力みかえってスピーチを始めようとした…。いきなり子どものダンスが始まってしまった。インドムービーの、セクシーな内容の歌に合わせて腰をくねらせる少年たち…。『うわ、仏教会の皆さま、訳が分からない様子だ。どうしよう…』と、焦ったのも束の間、すぐに『これでいいんだ』と、肩の力が抜けてきた。インドの人のやり方で、楽しくやれたら充分。それなのに一人で気をもんで…



ダンスは5, 6人ずつ3組が、それぞれ趣向を凝らせ、(衣装やスカーフなど、精一杯準備していた)一生懸命披露。3番目に踊った女の子のグループに、特別すてきなダンサーがいて、会場中魅了される。彼女(13, 4才の、素晴らしくきれいな子)のおかげで、空気が一気に和んだのを機に、やっとスピーチを始める。

出発前にめぐむさんが完璧に英訳してくれたスピーチ原稿を、私は前もってパイさんに渡し、「段落ごとにヒンディー語に訳して、子ども達にも理解できるようにして下さいね」とお願いしていた。このスピーチを通して、式典の意味を、大人にも子どもにも、ここにいる全員に伝えられなければ、せっかくのこの場が“形だけ”のものになってしまう可能性がある。(メインの“目録”による寄付金贈呈も、有馬頼底師直筆—この方は有名な書家でもあられる—の、「光の教室」の字が輝く？ネームプレートの贈呈も、その背景や贈る人の気持ちがいかに分かなければ、インドの人には仰々しい“白い紙”と“板”でしかないのだ) ちょっと緊張して、「アープ・カー・サー・ヘー？(ごきげんよう、みなさん)」と、第一声。

ところがパイさん、大役にあがってしまわれたのか、『まだ喋ってませんけど…』というところまで凄スピードでヒンディー語に訳してしまわれる。聴いているインド人も、ガナパティさん筆頭に、好き勝手にガヤガヤ…

『面倒になってきたな。適当にはしょってしまおうかな』と、ちょっとふてくされながら続けるうち、日本のハンセン病回復者の人々の話が出てきたあたりで、インドの人々の表情が変わり、話に耳を傾け始められた。(あとでパイさんが言っておられた。「スピーチの内容を子どもはほとんど理解しなかっただろう。しかし、50年も60年も、“囲い”の中で生きてきた人の話には、確かに何かを感じていた。この“感じる”ということが大切なのだ)終盤にさしかかって、BLPへの感謝の言葉と、ガナパティ所長への賛辞が出ると、ガナパティさんムズムズ。(演説したいんだ)「シスター・セラフィンの、強い信仰に支えられた、これまでの長い努力に感謝し、このように偉大なインドの人々とともに、モンスーンクラス子ども達を助けられることを、とてもうれしく思います」と続けると、シスターがうるうる…

出発前、めぐむさんが、「とにかく感謝、感謝！だよ」と、私の下書き原稿を大ゲサ(?)に修正してくれたおかげで、インドの人には大変満足のいくスピーチになったようだ。(分かりやすい人たちだ)

「では有馬名誉団長と、宮城団長にごあいさつさせていただきます」とスピーチを閉じ、心底ホッとす。ここまで一応何とかになった…。あとは人任せ。お二人のごあいさつの通訳は、仏教会ツアーの現地ガイド、インド人のヨグゲッシュ・マダンさんが日本語から即ヒンディー語に。(この人の日本語力はたいしたものだった。「～のことなのよね」とか、少し変わっていたが)



有馬師も宮城師も、状況を大変よく分かっておられ、ユーモアをまじえた簡潔なことばで、子ども達にやさしく直接語りかけて下さった。(なんか…すごい方々と、ものすごいところで、ものすごいことやっているのでは…)

続いて、“寄付金目録”の贈呈式。

まず有馬頼底・京都仏教会理事長より、BLP・ガナパティ所長に、BLPの30年間にわたるスラムでの実績に敬意を表し、今後の活動に役立てていただけるよう、“特別寄付金”の目録が手渡された。一先月、私は厚かましいと思いつつも、長澤局長にBLPの実状をお伝えしていた。—インド政府が出した“ハンセン病撲滅宣言”(インドにはもう患者はいませんよ、という宣言—いますけど)のおかげで、現在、BLPの内情は、かなり厳しくなっている。政府援助は当然減られ、逆に患者が増えているのだ。それは、同じように援助を縮小されて、機能が維持できなくなった地方の診療施設が出てきたために、そこに通っていた患者がとても遠いところから、はるばるムンバイにBLPの治療を求めてやってくるようになったからだ。「それでも、BLPの方々、助けを求めてくる人を決して拒まずに治療されているのです」—それだけの説明で決定されたこの“特別寄付”。BLPは、毎日スラムに通ってハンセン病に患っている人や子どもを捜し、学校に行っていない子どもをここに連れてくる役と、長い医療経験を生かして、教室の子ども達の健康をケアする役を担う、とても大切なパートナー。BLP本体

への、このご寄付は、事業全体にとっても本当に嬉しいことだ。

ガナパティさん、見事な字で縦書きされた日本語の目録を恭しく受け取り、「ゆり、何て書いてあるんだ」と訊く。

「寄贈・金〇〇万円也…ドルで〇〇くらい、とあります」と答えたら、不思議そうに(でも当然とてもうれしそうに)漢字に見入っておられた。

次に、教室の毎日の授業を取りきっておられるシスター・セラフィンに、今年1年間に、各寺院に設置された募金箱に寄せられたお金の総額を記した目録が贈呈される。シスターにも大体の数字をドルに換算して伝えたら、シスター、涙。しかし…「このあいだからエイズの子供達の教室も別に始めているんだけど…」へ?…そこにも寄付を、と言いたげ…。焦って、「いつか…」とごまかす。81歳というのに、この方のこのパワー！信仰があれば何でも出来るという見本のようだ。

日本人にとっては普通のものである目録。それが、本来はお互いの信頼の上に取り交わされる“約束手形”のようなものであることに改めて気付く。形式は、一応きちんと整えられていたが、インド式に大らかに、日本とインドの、人と人の間で“信頼する気持ちを交わす”という、本来の姿での“目録のやりとり”が出来たことが、とてもうれしかった。

有馬師が、厚い一枚板に墨跡も鮮やかに「光の教室」と書いて下さったネームプレート(教室の看板?)も、無事シスターの手に渡り、並んで記念写真。ガナパティさん、我慢出来なくなり「演説する」と宣言。(はい、分かっています。最後にスピーチしていただこうと、ちゃんとプログラムに入れてましたよ…)

「今この場で、有馬頼底師とシスター・セラフィンが、にこやかに並んでおられる光景の中に、このプロジェクトの神髄がある。国や宗教の違いを越えて、人と人が、ひとつの目的のもと一緒に働くことが出来るという事実を、この式典は、はっきりと

示した。京都仏教会をお迎えでき光栄だ！堂々とした締めくくり。完璧な仕上げ！ガナパティさんはそのあと私に、「子ども達への取り組みは、今、自分自身の満足になっている」と言われた。「医療第一。教室に関してはシスターの“お手伝い”」というこれまでのBLPの考え方が、3年経って変化したのか(そうならうれしいな)パイさんもそうだが、このクラスに来ることを、確かにBLPの方々は、楽しんでおられるようではある。



仏教会より「釈尊の教え」という御本^{ブック}—ヒンディ語・英語・マラーティー語?版の三種類—60冊が寄贈され、光の音符からも、ノート200冊を寄贈。(もとムンバイ日本人学校の先生でいらした名古屋の加藤拓由さんを通していただいたもの。150冊は、仏教会の皆さまが手分けしてインドに持ってきて下さっていた)“京都”という町を、インドの皆さんに知ってほしくて、京都の絵ハガキも全員にプレゼント。

最後はここにおられる人達のご紹介。まず、教室に“場所”を提供して下さっている「アクウォースハンセン病病院」の、お医者さまから…。若い可愛い女性。(インドには優秀な女性のお医者さんがとても多い)

続いて、仏教会の皆さまに、私から教室の先生をご紹介した。カースト社会で、これまでこのような席で、表立って紹介されることの少なかった(であろう)フローラ先生、アヌ先生、給食のおばさん…みな誇らしげに胸を張られる。(先生方の毎日の努力があつてこそ、のモンズークラスですから当然です)

ここまでの、約1時間。その間、子ども達は、完全にいつものペースを取り戻し、こちらの間を見ては何か“遊ぼう”としていた。“ゆりの扱い方”(おもちゃに出来る)を思い出し、抱きついたり“せっせっせ”をせがんだり…(今忙しいのよ～)日本の方にもすっかりうちとけて、仏教会の方の膝の上によじ登って、うっとりしている子も…。ある程度式典が理解できる年齢の子は、それなりに式をとともに出来た様子。

インド初日、内心びくびくしながら臨んだこの式典は、事前の予想を見事に裏切って、大成功に終わった(みたい)

『うまくいきすぎて怖い。これから絶対何かあるぞ…』と、次の予定の“スラム見学”に向け、気を引き締めた私でしたが、このあとスムーズに事は展開し、夜のディナーの席で、有馬名誉団長から思いがけない提案が出されて、皆びっくり!

インド側が、その提案に大喜びする、という成り行きをみました。

(この“提案”に関しては、現在京都で、仏教会と、詰めの話し合いをしている状況ですので、次号「その2」—「もう、いらん」という声が聞こえてきそう—でご報告します。…って、続きを書いているひまがあるかな…。)

このあとのインド体験記は、ひたすら、まめけな「ヒンディー語習得」の記録となりそうです。インド人にとり、ものすごく下手なヒンディー語を連発する「日本人のチビマダム」は、最高のおもちゃだったようで、会う人会う人が、喜び勇んで“先生”になってくれました。言葉を介してとてもたくさんインド人と仲良くなり、その彼らに大いに助けられて、無事日本に帰ってこられたようなものでした。

…で、もしよろしければ、気長に続きをお待ちください…ということ…

以下 次号につづく